『ヴィレット』の語り

玉木　祐子

『ヴィレット』(1853) の語りについて検討する前に、シャーロット・ブロンテが公刊作品において、それぞれ異なった語りの手法を用いていることをまずは確認しておきたい。『教授』では男性による一人称が、『シャーリー』では全知の語り手の統べる三人称が、『ジェイン・エア』では女性の一人称が採用されている。異なる人物の視点から描くことによって、出来事は読者に新たな位相を開示し、異なる感興をもたらす。こうした語り方への関心の萌芽は、早くも初期作品の中に、求めることができる。『アルビオンとマリーナ』と『婚礼』という、青年アルビオンをめぐる二人の女性のいわば三角関係を異なった視点から描いた物語や、旧約聖書のイエスを磔刑に処したポンテオ・ピラトをその妻の視点から描いた『ピラトの妻の夢』などがその好個の例だ。

また、『ジェイン・エア』の成功後の、作家、批評家、出版者たちとの交わりは、シャーロット・ブロンテに、単なる願望充足のはけ口としてではない芸術創造や、作家としての意識を否応なく芽生えさせたであろうし、あるいは、最も身近な作家であった妹たち、（エミリ、ブロンテ、アン・ブロンテ）は、それぞれ、エミリ・ブロンテが『嵐が丘』において、ロックウッド - ネリーの重層的な語りを、アン・ブロンテが『アグネス・グレイ』において女性主人公の一人称の語りを、『ワイルドフェルホールの住人』で書簡体を用いたが、それらを新装版のために校正した時期とヴィレットの執筆時期が近接していることも考え合わせるならば、シャーロット・ブロンテが語りに対して意識的であった、少なくとも、恣意的な語り手の選択はしなかったであろうと推察することは不可能ではない。

『ヴィレット』は、『ジェイン・エア』同様女性による一人称の語りが採用されている。しかし、同様の手法をとりながらも、両作品には大きな相違がある。この差異を手掛かりに『ヴィレット』の特質を考えてみたい。

二作品の差異の一点目として、まず、明確なプロットの有無が挙げられる。『ジェイン・エア』においては、十歳から青年期にかけてジェインを見舞う数々の不遇が、ゲーツヘッド、ロウウッド、ムーアハウス、ファーンディーンといった象徴的な名を持つ場所に仮託され、バニヤンの天路歴程さながらに、各地は文字通り語り手ジェインの人生のマイルストーンとして機能しつつ、ジェインの前に立ちはだかる困難とその克服のプロセスが、漸進的に進行するさまが描かれた。対して、『ヴィレット』におけるルーシー・スノウは、物語冒頭、いまだ舌足らずのポーリーナよりは年長で、十六歳とされているグレアム・ブレトンよりは年若い、娘時代の始まりと呼ぶのがふさわしいあいまいな年齢の語り手である。また、比喩的なことばで身の不遇が示唆されるが、ルーシーを見舞った不幸の個別具体的内容は詳らかではない。『ヴィレット』執筆中に草稿を送った出版者ジョージ・スミスとのやりとりで、彼からルーシーの過去を明らかにしたほうがいい、と示唆されたが、結局改変はなされなかった。当時のシャーロットのジョージ・スミスに寄せる篤い信頼を考えると、

ルーシーの来歴のあいまいさは、シャーロットにとって作家として譲れない点であったようだ。さらに、ルーシーの名付け親であるブレトン夫人宅への一時的な滞在に続く、マーチモント嬢との同居、彼女の死後のロンドン行き、さらにはラバスクールの首都ヴィレットへ、という地理的な移動という点において『ジェイン・エア』と『ヴィレット』に共通項を見出すことは可能だが、自己実現というセルフメイドマンの価値の達成をなぞるかの如く、ジェインの強烈なセルフというダイナモがプロットの求心力であり、推進力となりえていた『ジェイン・エア』と、『ヴィレット』における受け身のルーシー・スノウは明らかに異なっている。ルーシーの場合、転地は多分に受動的で、人生の選択というより、限られた選択肢の中で運命に翻弄された挙句の、偶然の産物以上のものではない。コロンビア大学の『現代文学・文化批評用語辞典』（*The Columbia Dictionary of Modern Literary and Cultural Criticism*）の編者は、プロット、ストーリー、出来事の関係を記述する際、巧みな比喩を用いている。曰く、「（プロット、ストーリー、出来事という）これらの用語の違いは、物語や劇を、糸でつながったビーズ玉にたとえることによって説明できる。構成要素である＜出来事＞は個々のビーズ玉であり、ストーリーは糸であり、プロットはビーズ玉が糸でつながれている順序と方法である」（松柏社, pp.318-319）。このたとえを借用するならば、『ヴィレット』という作品は、ルーシーという糸によって緩やかに紡がれたビーズ玉である、と言いうるかもしれない。個々の出来事の配置に因果律が見いだしがたく、前作のようには「順序と方法」にさして配慮がなされていないためである。

第二にあげられる違いは語りの信頼性 (reliability) である。一人称小説という語りの形態の利点のひとつは、視点人物の、物語内部における社会的な発話も内的な心情の吐露もひとしなみに可視化されることによって、読者に、通常であれば不可知の他者の心情、内的生活をのぞき見るという感興と特権意識を醸成し、ひいては作品への興味と共感を生じさせうることであると考えられる。だが、『ジェイン・エア』に頻出する「読者よ」（gentle reader, dear reader 等）の呼びかけや気遣いとは相反して、『ヴィレット』においてルーシー・スノウの行うそれは、同じく読者を気遣うそぶりを見せつつも、そのありようは、より屈折している。（以下、引用は拙訳による。）

ポーリーナの出立に数週遅れ、ブレトンを発つにあたって、当時はもう二度とここを訪れることはないなどと思いもよらなかった。再び、この静かで懐かしい通りを踏むことがないだなんて。私は半年ほど留守にしていた家に戻った。当然ながら親戚の庇護のもとに戻ることを喜んだと思われるかもしれない。ああ！心やさしい推測は害にはならないし、それゆえとりたてて、異を唱えることもなかろう。否というなどとんでもない。実際、わたしは、読者に、続く八年の間、穏やかな天候のもと、鏡面のように静かな港にまどろむ船のように、あるいは小さい甲板の上で身を延べ、天を仰いで、目を閉じ、ことによると長い祈りに没頭している舵手のようなものであったとご想像いただいても構わない。多くの女性や娘たちが、おおむねそのようにして人生を送ると考えられている。わたしもご多分に漏れずそうであって悪いわけはあるまい。だからわたしが怠惰に、ぬくぬくとして、丸々肥え太り、

屈託なく、クッションを敷いた甲板の上で、常に変わらぬ陽光のもと、眠気を誘う微風に揺られていたと思い描いて欲しい。とはいえ、そんな場合でも、わたしが何かの拍子で海に投げ出されるか、あるいは、しまいに船が難破したに違いないということは隠しおおせられるものではないのだが。

On quitting Bretton, which I did a few weeks after Paulina's departure--little thinking then I was never again to visit it; nevermore to tread its calm old streets--I betook myself home, having been absent six months. It will be conjectured that I was of course glad to return to the bosom of my kindred. Well! the amiable conjecture does no harm, and may therefore be safely left uncontradicted. Far from saying nay, indeed, I will permit the reader to picture me, for the next eight years, as a bark slumbering through halcyon weather, in a harbour still as glass--the steersman stretched on the little deck, his face up to heaven, his eyes closed: buried, if you will, in a long prayer. A great many women and girls are supposed to pass their lives something in that fashion; why not I with the rest? Picture me then idle, basking, plump, and happy, stretched on a cushioned deck, warmed with constant sunshine, rocked by breezes indolently soft. However, it cannot be concealed that, in that case, I must somehow have fallen overboard, or that there must have been wreck at last.（*Villete*, Chap.4）

物語の開始間もないこの箇所で、ルーシーが読者に対して行う呼びかけは、『ヴィレット』において特徴的なものだ。出来事の具体的な説明、明示を避け、読者が思い描くであろう展開をあらかじめ予想し、そう思いたいなら思ってくれて構わない、とその読みをいったん許容するそぶりをみせ、そのうえで、「事実」はほかの場所にあることを、数語の抽象的な言葉、ないしは比喩を用いてほのめかす。これは、『ジェイン・エア』に見られる読者の同情や共感を得ようとする姿勢とは明らかに異なっている。なぜか。おそらく、ブロンテは少女時代の夢物語のような創作から、作家として立つために、よりリアルな表現方法を模索しているのだ。真実は、当事者たる作中人物の口から直接語られることでリアリティーを担保されるのではなく、一見些細な印象の集積から徐々にその全貌を垣間見せるのである。

『ジェイン・エア』と『ヴィレット』の相違の三点目は、もっともらしさ（plausibility）の有無である。

『ジェイン・エア』は、1847 年の出版当初、『ジェイン・エア　自伝　カラー・ベル　編』(Jane Eyre an autobiography edited by Currer Bell) として出版された。ジェイン・エアという女性が自己の半生を語り、カラー・ベルなる編著者がそれを本の体裁にした、というフレームが設定されているのである。もちろん現代の読者であるわたしたちは、それが虚構の自伝であることを了解している。しかし、この枠組みが実に plausible、真に迫っていたことは、第 2 版でシャーロットがサッカレーへの献辞を付け加えたことによって、当時の一般読者の間に『ジェイン・エア』は、偶然にも作中のバーサ・メイスン同様精神を病ん

だ妻を持っていたサッカレーの愛人ではないかという噂が立った、というよく知られた逸話からもうかがえるだろう。

また、『ジェイン・エア』では、終章冒頭の、Reader, I married him. A quiet wedding we had: he and I, the parson and clerk, were alone present. から語りの時点（narrative instant）の間にさほどの時間的な隔たりはない。それがはっきりと表れるのは、同じく最終章の Mr. Rochester continued blind the first two years of our union; perhaps it was that circumstance that drew us so very near--that knit us so very close から My Edward and I, then, are happy: and the more so, because those we most love are happy likewise…. に続く部分である。

注目すべきなのは、引用文中の時制である。現在時制を用いて伝えられるジェインの結婚、出産から語りの現在まではわずか二年ほどのブランクしかない。対して、『ヴィレット』の、語りの時点は、作品上の語りと、語られる出来事との間に大きな時間差がある。ヴィレットは回想録であり、十代半ばから二十三歳までのルーシーを、五十代前後のルーシーが回想するという形式をとっている。二十年以上前の出来事を正確に記憶し、再現することは通常不可能だ。にもかかわらず、『ヴィレット』では、会話のはしばし、身に着ける衣服の色から天候にいたるまで、非常に微細に描写されている。少なくとももっともらしさ（plausibility）という観点から言えば、回想という枠組みが有効に機能しているとは言い難い。さらにまた、ルーシーがマダムベックの寄宿学校を訪れた際、使用人としてルーシーを採用するか否かをめぐって、ベック夫人がポールエマニュエルに意見を求める場においては、語り手の位置の特定さえ困難である。ヴィレットに到着直後のルーシーが、未だフランス語に不慣れで身振り手振りで意思の疎通を図らざるを得なかったことを考えると、引用以下の部分の整合性がつかない。

通訳を介して、彼女は今は出て行き、朝になったら戻ってくるようにといった。が、これはわたしには不都合だった。暗闇や街路といった危険の中に戻ることは耐えられなかった。わたしは力を込めて、しかし取り乱さず、落ち着いて、教師ではなく彼女に向かって直に話しかけた。「ご安心ください、マダム。すぐにわたしをお雇いくださることで、あなたの利益になりこそすれ、害にはなりませんわ。きっとわたしが十分お給金に見合うだけの働きをしようと努めるものであることがお分かりになるでしょう。そしてお雇いくださるならば、今晩こちらに止めていただくほうがいいのです。ヴィレットには知人もおりませんし、こちらの言葉も分かりませんから、どうして宿を見つけられましょう？」

「それもそうね」と彼女は言った。「でも少なくとも紹介状はあるんでしょう？」

「いいえ」彼女は私の荷物について尋ね、私はそれがいつ届くか答えた。彼女は考え込んだ。

Through her interpreter, she desired me to depart now, and come back on the morrow; but this did not suit me: I could not bear to return to the perils of darkness and the street. With energy, yet with a collected and controlled manner, I said, addressing herself personally, and not the maîtresse: "Be assured, madame, that by instantly securing my services, your interests will be

served and not injured: you will find me one who will wish to give, in her labour, a full equivalent for her wages; and if you hire me, it will be better that I should stay here this night: having no acquaintance in Villette, and not possessing the language of the country, how can I secure a lodging?"
"It is true," said she; "but at least you can give a reference?"
"None."
She inquired after my luggage: I told her when it would arrive. She mused. (*Villette*,Chap.7)

フランス語を十分に理解できないはずのルーシー・スノウがいかにしてこうしたやりとりを理解できたかに対して、ルーシーはこう述べる。「わたしはわたしの物語のこの部分をあたかもやり取りの全部を理解したかのようにつづけることにしよう。というのも当時はほとんど理解できなかったが、後になって訳してもらったからである。」(I shall go on with this part of my tale as if I had understood all that passed; for though it was then scarce intelligible to me, I heard it translated afterwards. *Villette*, Chap. 7)

これはかなり苦しい弁明である。いったい誰が、どういった経緯でルーシーにこうしたやりとりを通訳したのだろう。室内には、ベック夫人、ポール、ベック夫人との面接中の通訳であったマダムスヴィニーと呼ばれる英語教師の３人しかいない。通訳とされるマダムスヴィニーは、かなりはっきりとベック夫人からの否定的な人物評価を受けており（"You know I am disgusted with Madame Svini."）、自己の去就にかかわる以上この会話をそのまま伝えたとは思えない。またマダムベックも、その人物像から（Wise, firm, faithless; secret, crafty, passionless; watchful and inscrutable; acute and insensate--withal perfectly decorous…, *Villette*, Chap.8）、後日ルーシーに自身の話したことをありのままに語って聞かせたとは考えにくい。と、するなら、この部分はポール・エマニュエルがルーシーに語ったとみなすのが唯一可能な説明となりえようが、それにしてもいつ、なぜ彼がそれを行ったのか。動機はあまりにも希薄であると言わざるを得ない。

一人称の回想録という語りの形式も踏襲しながら、『ジェイン・エア』と『ヴィレット』はかなりおもむきを異にしている。これは、これら２作品がまったく異なる価値観を元に製作されたことを示唆しているのではないか。

『ジェイン・エア』は「語ること」を主眼とした小説である。これに対して『ヴィレット』は「読むこと」について書かれた小説である。よく知られたヴァージニア・ウルフの評言、「彼女（シャーロット・ブロンテ）は人生の諸問題に取り組もうとはしない。いや、そのような問題が存在することすら気づかない。制約されているがためにいっそう、全身全霊でこう主張するのだ。『わたしは愛する』、『わたしは憎む』、『わたしは苦しむ』、と」（She does not attempt to solve the problems of human life; she is even unaware that such problems exist; all her force, and it is the more tremendous for being constricted, goes into the assertion, "I love," "I hate," "I suffer.", *The Common Reader*, First Series: "'Jane Eyre' and 'Wuthering Heights'"）を

引くまでもなく、ジェインが愛憎を赤裸々に語るのに対し、ルーシーは観察者（observer）であり、十四章の有名な自己規定「人生の傍観者に過ぎない」（a mere looker-on at life）に顕著なように、ジェイン･エア的な意味で、つまり自ら進んで語り、行動するという意味で、「できごと」の当事者にはならない。『ヴィレット』はシャーロット・ブロンテの公刊作中唯一、『教授』、『ジェイン・エア』、『シャーリー』のような個人を明示するタイトルをつけられていない。これは、on looker として向ける都市ヴィレットへのまなざしが、この作品の主題であることを示すのではないか。さらには、一見後景に退くように見えて、実際は、そのまなざしの中にこそ逆説的にルーシー・スノウという人物像を前景化させる、というこの作品の仕掛けを、ここに見出すことができるように思われるのである。

ルーシーと同様に「読む」人物がいる。ポール・エマニュエルである。文学教授という彼の生業も暗示的だが、彼は時にルーシーをもしのぐ観察者となる。最初に彼が登場する、マダムベックによるルーシーの面接の場から、彼は観相学に詳しい人物として、ルーシーの顔つきからその人となりを読み解く。

以下引用箇所でルーシーが高く評価する彼の才能は、not a man to write books とあるように「本を書く」それではなく、つまり、何らかの体系的な思想を構築する才ではなく、読むこと、できごとに彼独特の解釈を与え、さらに豊かなものとして人に伝えるものだ。

ムッシュエマニュエルは本を書くような人ではなかった。しかし私は彼が何の気なしに、無造作な本にもめったに見られないようなこんな精神の宝をばらまくのをこれまでにも聞いた。彼の精神は実に私の図書室であり、いつでもそれが開かれたならわたしは強い幸福を覚えた

M. Emanuel was not a man to write books; but I have heard him lavish, with careless, unconscious prodigality, such mental wealth as books seldom boast; his mind was indeed my library, and whenever it was opened to me, I entered bliss. *Villette* , Chap.33

彼の「読み」は過剰さをはらむ。ルーシーをコケット（Coquette：なまめかしい女、色っぽい女）と呼び、その身なりに媚態を見出して憤る彼の姿はグレアム・ブレトンを興がらせるほどだ。が、一方彼のルーシーへの理解は、グレアムにとっての「無害な影」、ジネブラにとっての「ギリシャの人間嫌いの哲人」、ポーリーナにとっての「他者の理解を拒む謎」といったようにさまざまな人物が、表層的なルーシーの人物評価を与えるなかで、いちだんその本質に踏み込んだものとなっている。学校劇の場に特徴的であるように、時に過激なその「読み」によってこそ、ルーシー本人にすら自覚のない性質を顕在化させ、あるいは新たに生み出す契機となっていることに注意が必要である。

あれが僕の借りている部屋だ。名目上は勉強のためだけれど、実際は観察用なんだ。僕はあそこに腰掛けて何時間も続けて本を読むんだ。それが僕の流儀で、まぁ趣味だな。僕の

本はこの庭でね。その中身は人間性、女性の人間性なのさ

"That," said he, "is a room I have hired, nominally for a study--virtually for a post of observation. There I sit and read for hours together: it is my way--my taste. My book is this garden; its contents are human nature--female human nature…")

ここには、「僕の本はこの庭だ。本の中身は人間性・・・女性の人間性なのさ」とうそぶく彼の「読む人」としての性質が明白に現れている。

以上同作者の、同じく一人称小説である『ジェイン・エア』との比較を通して、『ヴィレット』の「読むこと」についての小説としての特質についての考察をこころみた。『ヴィレット』はルーシー・スノウの人生を、都市の中に生きる人々や事物を「読む」ルーシーの視線を介して浮かび上がらせる。この意味で『ヴィレット』が、開かれた結末（open ending）をとっていることは示唆的である。これは作者からの一種の挑戦であるといえるかもしれない。わたしたちは、ここで、読むという行為を通じて、個人の経験をふまえて、ルーシーの生にかかわっていくよう求められているのだから。

本稿は日本ブロンテ協会 2016 年大会（於県立広島大学）における研究発表（「書物としての都市」）に加筆・訂正したものである。